1950 年代の少女雑誌とジェンダー

Girl's Magazines and Gender in the 1950s

今田 絵里香（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 特定助教）

【ねらいと目的】

本研究は、1950 年代の日本において形成された少女雑誌文化が、いかなるジェンダー秩序のもとで生み出され、またいかなるジェンダー秩序を生み出していったのかを明らかにする。わたしたちのジェンダー秩序は 1950 年代に固定化され、広く普及したといわれる。もともとこのジェンダー秩序は、戦前日本の俸給生活者である都市新中間層に芽生えたものであった。性別役割分業、産児制限、家族団欒の奨励、子ども中心主義、母親の育児責任の増大。このような都市新中間層の文化が、1950 年代以降の高度経済成長時代において、俸給生活者の急増とともに広く普及していったのである。しかしこのプロセスについてはこれまで充分に解明されてきたとはいえない。というのも、戦後の改革は、男女共学の実施など、戦前のジェンダー秩序を大きく改変させるものでもあったからである。それゆえ戦前の都市新中間層のジェンダー秩序は戦後と連続しているものも、断絶しているものもあると思われるが、どの部分が連続、あるいは断絶しているのか、充分にわかっているとはいえないのである。本研究は、主に都市新中間層をターゲットにしていた戦前の少女雑誌文化が、1950 年代に戦前とは連続した形で、あるいは断然した形で刊行され、新しい戦後の少女雑誌文化を作っていくプロセスを捉える。これによって、戦後におけるジェンダー秩序の再構築のプロセスを把握することにする。

【活動の記録】

◆調査

１．2009 年 8 月 11～12 日、今田絵里香、東京、国際子ども図書館、『少女の友』『女学生の友』資料収集

◆学会発表

１．今田絵里香「1950 年代の少女雑誌文化における戦後ジェンダー秩序の形成」日本教育社会学会第 61 回大会、早稲田大学、2009 年 9 月 12 日

◆研究会発表

１．今田絵里香「戦後日本の少女雑誌文化における異性愛主義の誕生――少女雑誌『ひまわり』と『ジュニアそれいゆ』の比較から」、GCOE 第 3 回全体研究会「戦後日本におけるジェンダーとセクシュアリティの歴史研究へ向けて」、2009 年 7 月 3 日

２．今田絵里香「戦後日本の少女雑誌文化におけるジェンダーの再編成――『少女の友』『女学生の友』におけるエスとセンチメンタリズムの排除」、GCOE 歴史研究班共同研究「戦後日本におけるジェンダーとセクシュアリティの歴史研究」第 1 回研究会、2009 年 10 月 23 日

３．今田絵里香「1950 年代の少女雑誌とジェンダー」、GCOE 研究成果報告会、2010 年 2 月 16 日

◆研究会開催

１．共同研究「戦後日本におけるジェンダーとセクシュアリティの歴史研究」第 1 回研究会開催

今田絵里香「戦後日本の少女雑誌文化におけるジェンダーの再編成――『少女の友』『女学生の友』におけるエスとセンチメンタリズムの排除」2009 年 10 月 23 日

２．同第 2 回研究会開催
中山良子「1950 年代の雑誌『平凡』に見る、「十代の性」規範の形成」2009 年 11 月 28 日

３．同第 3 回研究会開催
日高利泰「1960 年代における少女マンガ雑誌の成立プロセス―『少女コミック』と『少女サンデー』を例に」2009 年 12 月 23 日

４．同第 4 回研究会開催
朴珍姫「韓国純情漫画の歴史」2010 年 1 月 18 日

５．同第 5 回研究会
トジラカーン・マシマ「タイにおける日本少女マンガの普及」2010 年 2 月 18 日

６．同特別セミナー開催
澁谷知美「包茎の言説史――戦後日本における男性の性的身体のイメージ形成」2010 年 3 月 2 日

【成果の概要】

戦前の中等普通教育は男女別学体制であったが、このような体制の下、高等女学校に通う都市新中間層女子に狙いを定めた少女雑誌『少女の友』においては、少女同士の親密な関係である「エス」を描いた少女小説が多数掲載されていた（今田〔2007〕）。しかし今日の少女雑誌は異性愛が中心的なテーマとして扱われている。このような異性愛中心主義の文化は、どのようなロジックで少女文化の中心となっていったのだろうか。戦後の少女文化はその研究のほとんどが 1970 年代以降の少女マンガに関するもので占められ、それ以前については未開拓なままである。報告者は、戦前型少女雑誌として『少女の友』、戦後型少女雑誌として『女学生の友』を分析することで、少女雑誌文化におけるエスの排除とそれに伴う異性愛の勢力拡大を捉え、戦後ジェンダー秩序について考察した。

その結果、戦後の『少女の友』はエスから異性愛へ、センチメンタルさから明朗さへ、少女小説から少女マンガへ、という形で方向転換をすることがわかった。そしてそれらはなんの関連もなく転換していくわけではなく、相互に強く結び付きながら転換の道を辿っていくことがわかった。そのロジックは、エスはセンチメンタルなものであり、そのセンチメンタルさは否定的なものであるという捉え方を前提にしていた。そしてこのようなエスを培養し、センチメンタルさを演出するのは少女小説であると考えられていたのである。その意味で、少女小説も、少女小説を愛する文学少女も否定的なものとして捉えられているといえる。一方、異性愛は明朗なものとして考えられ、肯定的に捉えられていた。このような変化からわかるのは、エスはセクシュアリティというよりもジェンダーであって、「少女らしさ」の一つであったということである。戦前の『少女の友』はセンチメンタリズムこそ「少女らしさ」の核であると考えていた。戦後、『少女の友』が行ったのは、そのセンチメンタリズムと不可分な関係にあるのがエスであるとしつつ、「少女らしさ」からエスとセンチメンタリズムを排除し、新しく明朗さを加えることであった。

ところで、センチメンタリズムはもともと少年も少女も持つものとして捉えられていた。しかし総力戦体制下、「少年らしさ」からセンチメンタリズムが排除され、「少女らしさ」にのみ含まれるものとされた（今田〔2007〕）。とすると、戦後『少女の友』が行おうとしたことは、「少女らしさ」からもセンチメンタリズムを排除し、「少年らしさ」に近付けようとすることに他ならない。その意味で、戦後『少女の友』が行おうとしたこともまさに、「少女」の「少年」化であったといえよう。

参考文献　今田絵里香『「少女」の社会史』勁草書房、2007 年

GCOE 第 3 回全体研究会